

令和4年度小諸市総合教育会議議事録（概要）

日時：令和5年3月14日（火）午後4時00分から午後5時30分

場所：小諸市役所3階第2会議室

出席者：市長 小泉 俊博

教育長 山下 千鶴子

教育長職務代理者 矢嶋 真

教育委員 小山 真紀

教育委員 柳澤 由美子

教育委員 田中 隆之

進行：富岡教育次長

事務局：総務部長、学校教育課長、子ども育成課長、文化財・生涯学習課長、スポーツ課長、人権同和教育課長、企画課長、教育総務係長、学校教育係長、企画調整係長、企画調整係員

議事内容

1 開会

（開会あいさつ：柳澤総務部長）

2 あいさつ

（小泉市長）

日頃は、教育行政の推進に多大なご尽力をいただいているとともに、本日は、ご多用の中ご出席をいただき誠に感謝申し上げます。本年3月定例会の開催にあたり、令和5年度の施政方針をお示ししましたが、この中の「子育て・教育」については、社会情勢の変化にとらわれず、子どもたちが自らの課題を見つけ、自ら学び、考え、判断して行動できるよう「生きる力」を育むために、豊かな心と健やかな身体の育成・基礎学力の向上等に取り組み、その学びを支える教育環境の整備に向け、教育委員会とともに、施策の推進を図っていくこととしています。また、喫緊の課題と位置付けている「学校再編」は、早期に「学校再編計画」の策定を完了し、この計画を基に再編校の建設・学校運営の検討等に取り組むほか、再編校以外の学校施設の長寿命化等を計画的に進めていくこととしています。2期目の市長公約において、小諸市が市内外の人々から選ばれ、持続可能なまちで在り続けるために、目指すべき姿、ビジョンとした健幸都市こもろ（小諸版ウエルネス・シティ）を掲げ、各種施策を実施しているところですが、これは、

健康・福祉、子育て・教育、環境、産業・交流、生活基盤、行政経営など、あらゆる分野において、健康、健全であることで、市民が健康で生きがいを持ち、安全・安心で豊かな人生を営めるまちを目指すものです。その中でも、特に「人口動態における自然増への挑戦」を掲げていますが、自然増とするためには、若いファミリー層世代に安心して子どもを産み、育てていただくことや、教育の充実を図ることが重要となります。そして、市内外の方々から、小諸が、選ばれるまち、魅力があり価値を生み出すまち、であるためには、まずは、教育が健康で健全であることが不可欠だと考えています。急速に進む少子高齢化、国際化や情報化の進展、さらにはライフスタイルの変化など、子どもたちを取り巻く環境は刻々と変化しており、加えて、コロナ禍の中、教育現場を取り巻く情勢も日々変化を強いられています。このような情勢を的確にとらえながら、これまで培われてきた本市の教育方針をベースに、時代の変化に迅速に対応した施策を進めていくことが必要不可欠と考えます。この総合教育会議については、この場で結論を出すというのではなく、率直な意見を出し合う中で、市と教育委員会が、相互の役割・権限を尊重しつつ、本市の教育の将来像や課題を共有し、効果的に教育行政を推進するために設置されているものです。本日は、「子どもたちのより良い学びの環境について」を議題とさせていただきますが、是非、皆様には、忌憚のない、積極的なご発言をお願いし、開会にあたってのあいさつとさせていただきます。本日は、よろしくお願い申し上げます。

3 会議事項

(司会進行：富岡教育次長)

(1) 子どもたちのより良い学びの環境について

(富岡教育次長)

本日の会議は結論を出すということよりも市長と教育長、教育委員の皆様が意見交換をすることで、将来像のあるべき姿や課題を共有して、本市の教育行政の推進を図るという目的です。遠慮のない、また、忌憚のない積極的なご発言をお願い申し上げます。まずは、本日のテーマである、子供たちのよりよい学びの環境について、山下教育長からご意見を申し上げます。

(山下教育長)

子ども達にとっての最大の教育となる環境は、教師以外にはありえないと思っています。私の教師時代の失敗談を紹介しますが、私は教師時代、水明小学校に6年間おり、特に3年目からの6年目までの4年間は特に充実したものでし

た。学級づくりはうまくいき、子どもや保護者とも良く繋がることができ、成功体験として感じながら佐久市の学校へ異動しました。しかし、次の学校では子ども達とは噛み合わない3年間を過ごすことになりました。私は大きな間違いを2つしていました。1つ目は自分を過信していたことです。自分がクラスを作った、子どもを育てた、と勘違いしていました。他の教員、また、保護者や地域と一緒に育てたはずなのに自分の手柄のように思ってしまったのです。2つ目は、子ども達はそれぞれ違うのだという事を自覚しておらず、水明小学校の子達と同じように育てようと思ってしていました。そのことに気づき私は強く反省しました。子ども達はそれぞれ考えも違い、成長も違い、それをまとめながら授業を作っていかなければなりません。日々の生活も含め、教育現場は互いに育ちあっていくものであると今は確信しています。小中一貫のカリキュラム作りを進めているが、その子どもごとのカリキュラムが立てられるべきであると思います。学校再編に向けて、主体性に関わる力、自己の強みを発揮する力、社会に参画する力を育てていくには、子どもの価値観・世界を知らなければなりません。若いころから言われているのは、子どもそれぞれのカルテを取るべきということです。普段との違いや気づいたことを記し、その子がどういう子なのかを考えることが重要です。そのためには、より重層的に子どもを見る必要があります。1人の先生に任せるのではなく、多くの人々の目で育てていくべきです。保護者や地域の人も含めて、チームで育てていくことが重要です。子どもと教師の在り方が大切であり、教師が子ども達をしっかりと見ることができ学校教育の環境を作っていきたいです。

(富岡教育次長)

続いて、小泉市長から意見をお願いします。

(小泉市長)

私は、行政の立場から話をさせていただきます。学校で教わったかと思いますが、孟母三遷の教えと言って、孟子とお母さんが墓地の近くに住んでいたが、葬式の真似事を孟子がしてしまうため市場に引っ越したが、今度は商人の駆け引きの真似事をするので学校の近くに引っ越した。そうすると、学校の礼儀作法を真似るようになり、これは最適な場所だと思い、引っ越すのをやめたという話です。昔この話を read した時、子どものために引越しまでするのは過激であるように感じていましたが、故事として、教育には環境が大事であるということを示しており、そのお母さんが孟子という偉人を育てたのです。例えば軽井沢では、ISA AKというインターナショナルスクールがあり、風越学園では幼稚園から義務教育学校の3歳から15歳までの期間、特別な環境下で一人一人が自分づくり

をしています。佐久穂町では茂来学園がイエナプランに特化した教育を大日向小学校の空き校舎を活用して行っています。御代田町のサムエル幼稚園では、発達障害の子の対応を行っており、健常児と一緒に学ぶことができます。特色のある学校を求め、教育のために移住を実践している人がいます。軽井沢は特に風越学園を求めて移住する人が多く、現代版の孟母三遷を実践しています。なぜこれが必要なのかと言うと、グローバル化が進み、ボーダーレスであり、国境のない時代をこれからの子ども達は生きていかなければなりません。日本は今まで画一的な教育がなされてきました。時間を守り、言われたことを正確にできる社会人が求められていたように思います。これからは昔とは違った環境の中で時代を切り開いていかなければならない時代であり、今までの教育スタイルでは通用しなくなってくるはずです。文化的・知的な豊かな人生を送る力をつけることや、教育の経済的格差がたびたび言われていますが、将来的に仕事をして収入をしっかりと得ることに影響してくるはずです。しかし、これらの学校は私立が主体ですが、私立に通わなければいけないわけではないと考えます。小諸の子ども達がより良い環境の中で育つことができるよう小学校の再編を進めており、県教育委員会が主体で高校再編も進めています。公立学校として、これからの時代をたくましく、自分で考えて生き抜く子ども達を輩出できるチャンスであると考えます。私立だからできる、公立だからできないというわけではなく、そこに携わる皆さん、保護者の皆さん、学ぶ子ども達が変わっていけば、教育は変わっていきます。まずは考えて行動していくことが重要です。私は、国語力がベースになるのではないかと思います。祖国とは国語ですが、小諸市からノーベル賞受賞者を出すのが目的というわけではないですが、無い道を切り開いていくことは大切であり、藤原正彦先生の言葉を借りるならば、自然豊かな中で創造性豊かな経験をした人が大成するのではないかと思います。これから小諸高校の跡地や再編で空いた小学校の跡地の活用を考えていきたいです。小諸高校は規模も大きく、大学や高専、IT関係の専門学校、または研究機関なども良いと考えています。子ども達が高校を卒業した後に小諸でも学ぶことができ、また、外から学びに来る人と小諸の人との化学反応を期待したいです。

(富岡教育次長)

それでは、教育委員の皆様のご意見をお伺いします。

(矢嶋職務代理)

私も、教育長がおっしゃられたように、教育において大事な環境は教師であると思います。小諸では梅花教育を進めていますが、梅花教育には柱が3本あります。1つ目は熱心に学ぶ子ども、2つ目は子供の学びを支える地域の教育、3つ

目は子供のために自分を磨く教師です。小諸では教師の研修に対して援助があり、教師の力を伸ばし、力のある教師から良い学びを子ども達が受けることができる環境となっています。能力の高い教師を他から連れてくれば良いのではなく、教師それぞれが自分を伸ばそうと思っていることが大切です。子どもが考え、自分を発揮する姿を後押ししてくれる教師、そんな教師がより良い学びの教師であると考えます。梅花教育の補助金で一流の講師を呼ぶこともでき、例えば数学の教科書を作っている教授を実際に呼び、そういった方から直接学ぶことも可能です。また、先生が研修として、外に学びに行くこともでき、教師を育てる地盤ができていると思います。上からこういうことが足りないから研修を受けろと言う指示は教員から反発がありますが、自分の受けたい研修を自主的に受けることができるので、教師自身から積極的に研修を実施している部分も良い点です。小中一貫教育については、小学校と中学校の先生の交流が行われることを一番に願っています。小学校の先生が中学校の先生に専門的なことを学ぶのみではなく、反対に、中学校の先生が小学校の先生から学ぶことも多いです。小中一貫教育にも生きてくるような、教師を育てる、という小諸の環境が維持されてほしいと思っています。

(柳澤委員)

先日、長野県の公立高校の入学試験が新聞に載っており、国語の問題を見ましたが、相撲の力士の髪を結う職業の先輩と後輩のやり取りから色々なことを読み取っていく問題がありました。問題の難易度は高く、こういった問題を解けるレベルまで子どもを育てるのは大変なことであると感じました。孫が水明小におり、ソルガムという穀物を育て、それを使い料理を作る学習がある。その学習は、先生方が草取りなどの作業を行い、地域の人が土地や農機具を貸してくださるなど、多くの方が協力をしてくださっています。そのおかげで子ども達は体を使い、達成感を感じることができています。そういった人との関わりや経験を経ることにより、先ほどの文を読み取れる中学生になっていくのはでないかと思います。そして一番重要なのは担任ですが、担任1人が背負うのではなく、コーディネートすることも重要です。例えば、子ども達同士の教えあいを助けることで他の子のことを考えることができる子が育ちます。また、他の学年の先生や地域の人などとの関係を作り、自分一人ではなくそういった方と関わりながら子供を育ててほしいと思います。IT化の中でそういった部分が無くなってしまいそうで心配ですが、小諸の子どもはそういった関わりを重視して、のびのびと育ててほしいと思います。

(田中委員)

今回のテーマは深く、広いテーマであるが、行政が考えるより良い学び、学校が考えるより良い学び、子供達が考えるよりよい学び、地域の考えるよりよい学び、それらはそれぞれ違うはずです。子ども達が自発的に学ぶことができる環境が一番重要ですが、それに何が必要かと思うと悩ましく、私はあえて何もしないことも重要であると考え子育てをした時期もありました。私立の学校も様々な学校があり、都会からの移住もありますが、親や地域の人がいっしょに子どもに寄り添っていくことが重要です。概念的な話になってしまいますが、子どもは必ず大人になります。子どもの時の思い出は大切であり、楽しかったこと、悔しかったこと、苦しかったこと、そういった経験ができる環境が大切な環境であり、成功・失敗の体験を人生に生かしてもらいたいです。ナナメの関係とよく言いますが、見守り隊や地域の方と子どもがふれあうことで感性が磨かれます。先日、私はカメと同じぐらいのスピードで歩く女の子を見かけ、始業時間に間に合うのだろうか、その時は大変心配しました。しかし、別の日に、その子がおばあさんらしき人に連れられ、シャキッと歩いている姿を見かけ、この子も周りの人に支えられながら、これから立派に育っていくのだと感じました。みんなで支えあう、そういった小諸市であってほしいと思います。

(小山委員)

私には二人の子どもがいますが、小中学校に通っている時、教育委員会は遠い存在でした。見えているのは学校と、自分と、子供と、周りの世界だけであったことを委員になって気づきました。今はこういった人たちがいたから教育ができていたのだと感じています。不登校と学力の問題があると聞いていますが、学力が高いと将来の選択肢が広がると考えます。不登校については、学校の楽しさ、友達、地域の人と関わる楽しさを実感してもらうことが重要です。今となっては自分の子どもの頃の記憶は断片的なものですが、その一つ一つが人格形成に大きな影響があり、大事な時期です。各自治体に教育委員会がある中で、小諸の特徴は、大都市ではないからこそ、それぞれの顔が見え、分かりやすい規模であり、きめ細かい対応ができるのではないかと考えます。家庭環境は様々であり、保護者の考え方や経済的な差などもありますが、公立の学校教育は平等であるべきです。学校では、それぞれの良さを認めてもらい、色々なことを学ぶことができます。公立なので使えるお金は限られており、ハードも大事ではありますが私はソフトがより大事であると思います。綺麗ごとにはなってしまいますが、理想がなければいけないと思っています。子ども達にこういう風に育ってもらいたいという思いを抱き、市と地域と教師と保護者とで、きめ細かくすり合わせていき、それを繰り返していく必要があります。保護者の方々から、小諸市で子育てをしていてよかった、寄り添ってもらった、育ったここで子育てをしたい、などと思

ってもらえるような環境を作る役目を担いたいと思います。学校再編についても、子ども達に最良の教育を受けてもらいたいという考えはみんな一緒であり、学校づくりに携われることは光栄かつ身が引き締まる思いです。

(小泉市長)

矢嶋職務代理の発言で、自分から努力する教師を支え、本物に触れてほしいとありましたが、小諸は島崎藤村とゆかりがあり、新任の先生にそれに触れてもらうことができる環境があります。また、美術館も複数あり、小さい街にしては誇らしいことです。音楽のまちの取り組みも6、7年進めてきており、小学5年生についてはプロの一流の音楽に触れる機会があることは大変良いことです。自分の子どもが小さい頃は、流れ星を見せに行ったり、カブトムシを取りに子どもを連れて行ったりしましたが、そういった記憶は大事なものです。小諸は芸術・文化や自然に触れるチャンスがあります。豊かな人生とは色々ですが、学力をつけるというのは将来の選択肢を広げることができ、芸術の世界に進まなくても、豊かな心を育てる事につながります。小諸の良い部分を、家庭教育にもぜひ生かしてほしいです。次に、先ほどハードだけではなく、ソフトが大事であるという話がありましたが、人との関わりは人格形成に大変重要です。私は担任の先生に恵まれ、人に恵まれてきましたが、子ども達と話すとはそうではないこともあります。そう言った時にどのようにフォローしていくべきか、人に恵まれず外れてしまった時にどうしていくべきかを考えることが必要です。小中一貫教育というシステムの中で先生同士が協力し合うことで解消できることもあるでしょうし、地域の人と触れ合うことで解消できることもあるかと思います。高齢社会は間違いなく来ており、子ども達が高齢者をリスペクトし、関わりを持っていくことが大事になってきます。

(富岡教育次長)

複数のご意見で挙がっていますが、教員が力を付けることに関して、ご意見をいただきたいです。

(小山委員)

過去の経験から言いますと、保護者の中では、子どもと相性が良い先生を、良い先生と考えがちですが、そんなに単純なものではなく、良い先生の定義は難しいです。私が子どもの頃の担任の先生の中には強烈な先生もいましたが、そういった先生とふれあった経験も社会に出ていく中では大事なことです。先生の激務の中で、きめ細かい教育を求めるのは相反するようにも感じますが、部活動など、外の方と協力できるものはそちらにお願いし、先生には学級に集中してもら

たいです。担任の先生と話す機会はあまりないため、教育委員会が先生の気持ちを聞く機会など、教育委員会と一般の先生が情報共有していける仕組みを作っていたいただきたいです。

(柳澤委員)

最近、クラスに補助の先生が入ったり、学年を超えた学習が増えたり、昔と比べ、担任の先生一人の状況ではなくなっているように感じています。苦手という人は誰しもいるが、必ずしもマイナスになるとは限らないです。色々な人とふれあっていくことが子どもには重要であると思います。

(田中委員)

小山委員と同じ考えですが、保護者の中で、良い先生、悪い先生というのが生まれてしまいます。先生は人間なので、短所も長所もありますが、新人であってもプロの道を歩んでいる人です。それを信じて子どもを託すことが保護者には大切です。先生のなり手不足が問題ですが、先生のための環境も我々が作っていかねばなりません。先生とうまくいかなかった場合も、次へのステップと考え乗り越えていくべきです。例えば、子どもが、国語が好きになる、数学が好きになる、というのは先生の影響が大きいです。先生には、人間力を培っていただき、親が子どもに教えられない部分をしっかりと育ててほしいです。

(小泉市長)

子どもから聞いた話では、「私は子ども嫌いです。」という先生がいました。人間なので好き嫌いは誰にでもあるかと思いますが、子どもを好きじゃない人が教師になってはいけないと思います。そういう例外なことも、ケースとしては実際にあることを認識していただければと思います。

(矢嶋職務代理)

田中委員の話の中で、おばあさんと歩いていた子どもの話がありましたが、子どもの成長を見ることで、教師もエネルギーをもらうことができます。子どもだけが成長するのではなく、それを見る教師も成長するものです。PTAの役員と関わることで、一人前の教師にしてもらう部分もあり、人間として成長します。子どもと教師と一緒に成長していくことが大切です。

(山下教育長)

私が小学校1年生の時に年配の怖い教員がおり、近寄ることもできなかったが、ある日、私のことを褒めてくれて、私もまんざらじゃないのだなと思うこと

ができ、それからやる気が出るようになりました。子ども達はいろいろなことを思って生きていますが、誰もが褒めてもらいたいはずです。良い先生はここぞという時に認めてくれる人なのだと思います。小諸にまつわる木村熊二先生や、伊藤長七先生も、教育は人なりという言葉を残しています。当時、長七先生が朗々と隣のクラスまで聞こえるぐらいの声で授業を行っていたら、隣のクラスの子がそれを羨ましがっていました。その後、クラスの中の仕切りを取って、長七先生が授業を行い、もう一人の先生が補助をしたというエピソードがありますが、過去の先生方は本当に凄かったのだと思います。好き嫌いは誰にでもあります、価値観は経験しながら変わっていくものです。色々な人と出会うことが重要であり、その中で成長していくことができます。都会では1年ごと担任が変わる制度があるようですが、先進的な事例も参考にしつつ、子ども達が自分の思いを担当に伝えられる学級を作っていきたいです。先生方も意見を言われたときに、子どもが反発してきたと思うのではなく、良い指摘をしてくれたと感謝するような、余裕のある学級経営ができる先生を育てていきたいです。小学校再編に向かって、それぞれの中学校区でまとまっていく気運が高まり始めています。教師たる者どうあるべきかということをしつかりと先生達に伝えていき、そして子ども達が先生のその良い変化に気づけるような学校づくりをしていきたいです。

(2) その他
(特になし)

4 閉会

(閉会挨拶：柳澤部長)